

サカ＝クシャン時代のマトゥラーにおける マニバドラ信仰の社会背景について

——通商路と仏教遺跡の奉献者を手がかりに——

高 橋 堯 英

1. はじめに

法華經の陀羅尼品には Vaisravana や Hārītī の陀羅尼が見られ、ヤクシャの大將軍 Vaisravana が法華經信奉者の守護者として描かれているが、これも、古代インド社会におけるヤクシャ信仰の隆盛を物語る一例であると考えられる。サカ＝クシャン時代に政治経済の拠点として栄えたマトゥラー市の周辺地域からは、数多くのヤクシャ・ヤクシニー像が発見されている。筆者はかつて、マトゥラー考古博物館のカタログに掲載されているサカ＝クシャン時代を中心とするヤクシャ像やヤクシニー像を整理してみたことがあったが、特に気になったものが単独に主神のごとく礼拝されていたと想像される二体のマニバドラ (Mañibhadra) の像であった。マトゥラーで発見されたこれら二体の巨大なマニバドラ・ヤクシャに対する信仰の背景を、サカ＝クシャン時代の通商路との関係で考えてみたい。

2. マトゥラー市周辺で発見された二体のマニバドラ像

マトゥラー市の南24キロ地点のアグラ＝マトゥラー街道東側にあるパールカム (Pārkhām) から、紀元前二世紀の半ば頃と考えられるヤクシャ像が多数発見されている。特に注目されるものが1882—83年に発見された、土地の人々が devatā と呼んでいた巨大な灰色の砂岩製ヤクシャ像である⁽³⁾。台座を含め高さ2.6メートルあり、ドーティーを着したデブプリとした腹をしたヤクシャ像で、立ち方は一種の支脚遊脚のスタイルをとっている。両腕は脇の部分から欠損し、顔も破壊されているが、台座上に紀元前2世紀中葉頃のブラーフミー文字で書かれた、

「マニバドラを崇拝する集団 (Māñibhadrapūgya [Mañibhadra congregation]) に属す8人の兄弟によって聖なるものの像 (bhagavato pratimā) が造られた。クニカの弟子のゴミトラカの作である⁽⁴⁾」

という碑文から、そのヤクシャ像がマニバドラであることが解っている。その他、パールカムからは「ナフサミトラの請いによる⁽⁵⁾」という碑文を帯びたクベラ像 (マトゥラー博収蔵番号1266) と判読不可能な碑文の断片が刻されたクベラ像 (マトゥラー博収蔵番号1264) も発見さ

れている。更に、パールカムから同じ街道沿いに北に約6キロの地点で、ナーガの霊廟があった Carṅāon（マトゥラーから南に約16キロ程の地点）から南に約3キロの地点にあるバローダ（Baroda）村でもヤクシャ像の断片が発見されている。⁽⁷⁾ 頭部・左腕と上半身の一部（高さ1.27m）と、足の部分と基壇部（高さ1.347m）から成り、パールカムのマニバドラ像より大きい3.6mくらいの高さの巨大なヤクシャ像であったと推測されている。彫刻は痕跡をとどめぬほど破損しているが、大きな耳飾りや、背面に彫刻された四つの房が付いたネックレスと腰帯などがパールカムのマニバドラ像と類似していることによりマニバドラ像であったと考えられている。

ヤクシャ信仰とは、人の生に欠かせない「水」を象徴する樹木とその生命力が devatā（「半神半人」）であるヤクシャやその女性形であるヤクシニーとして崇められ人々の礼拝の対象とされた信仰とされる。香華灯火や、時として人肉や動物の肉・魚が供物とされ、子孫繁栄・物質的繁栄・旅行の安全などが、様々なヤクシャやヤクシニーが宿るとされた聖樹に祈願されていた。血なまぐさい供儀の要素が希薄になるに伴い、次第にジャイナ教や仏教にも受け入れられ、様々なヤクシャ像やヤクシニー像がストゥーパの塔門や欄楯などの建築物を荘厳する彫刻のモチーフとして盛んに利用されるようになっていた。

このようなヤクシャの中でもクベラは、カーベリー川とナルマダー川の合流地点で行った厳しい苦行によりシヴァ神によってヤクシャの頭領に任じられ、黄金のメル山の四分の一の富を管理し、その富を人々に分け与え、その黄金により人々を不死にする存在と考えられていた。⁽⁸⁾ マニバドラはクベラに次ぐランクを占めるクベラ軍の司令官とされる。⁽⁹⁾ Ram Nath Misra によると、*Rāmāyana*（VII.15.1-6）では、マニバドラは四千のヤクシャを率いて羅刹を打ち破ったとされ、*Mahābhārata* では、Svetagiri 山脈の Mandara 山に住み、様々な姿をしたヤクシャにかしずかれている、と述べられている。⁽¹⁰⁾ Misra は、マニバドラは特に東インドで礼拝されたヤクシャであったが、*Mahāmāyūri*（1.31）には、マニバドラと弟 Pūrṇabhadra がガンダーラ地方に相当するとされる Brahmāvati の守護神であると述べられ、ガンダーラ地方にも縁あるヤクシャであったという。⁽¹¹⁾ Misra はマニバドラが旅行者や貿易商が信仰の対象とした devatā であったことを指摘している。⁽¹²⁾ *Mahābhārata* の Aśvamedha Parva では、大戦争に勝利はしたがすべての富を失ったユディシュティラに Vyāsa が亡くなった者たちの供養のため Aśvamedha の供儀を行うべきであると勧め、その助言のために嘗て Marut 王が残した金塊を取りに行くように促す場面で、金塊を掘り起こしに行く前に、山中で、バラモンたちに三つの目を有する Mahādeva（Śiva 神）に対して火の祭りを行わせ、次に Mahādeva の従者である恐ろしい存在たち（ghostly beings）を供養し、更にクベラとマニバドラに対する供儀を行い（*Mahābhārata* 65.1-8）⁽¹³⁾ 両 devatā に対し畏怖と尊崇の念が示されている。

また、*Mahābhārata* 中の「ナラ王物語」の部分（III.61.120-125）では、夫のナラ王に置き去りにされ、夫を探して求め恐ろしい苦行林に入ったダマヤンティー妃が、蛇に飲み込まれそう

になったり、彼女を蛇から救った木こりに性的危害を加えられそうになったり、不可思議な苦行者たちに遭遇したりした後に、やっとの思いで葦の茂る水辺にたどり着き、そこでたまたまキャンプしていた隊商の人々に救いを求めた場面で、彼女が隊商の長シュチに夫ナラ王を見ていないかと尋ねると、隊商長は、

『美しい女よ、私の言葉をお聞きなさい。美しい微笑の女よ、私はシュチという隊商長です。誉れ高き女よ、私はナラという名の人に会ったことはありません。私は人の住まぬこの恐ろしい森で、象、豹、水牛、熊、鹿をみましたが。我々に夜叉の王マニバドラ（隊商の守護神）の御加護⁽¹⁵⁾がありますように。』

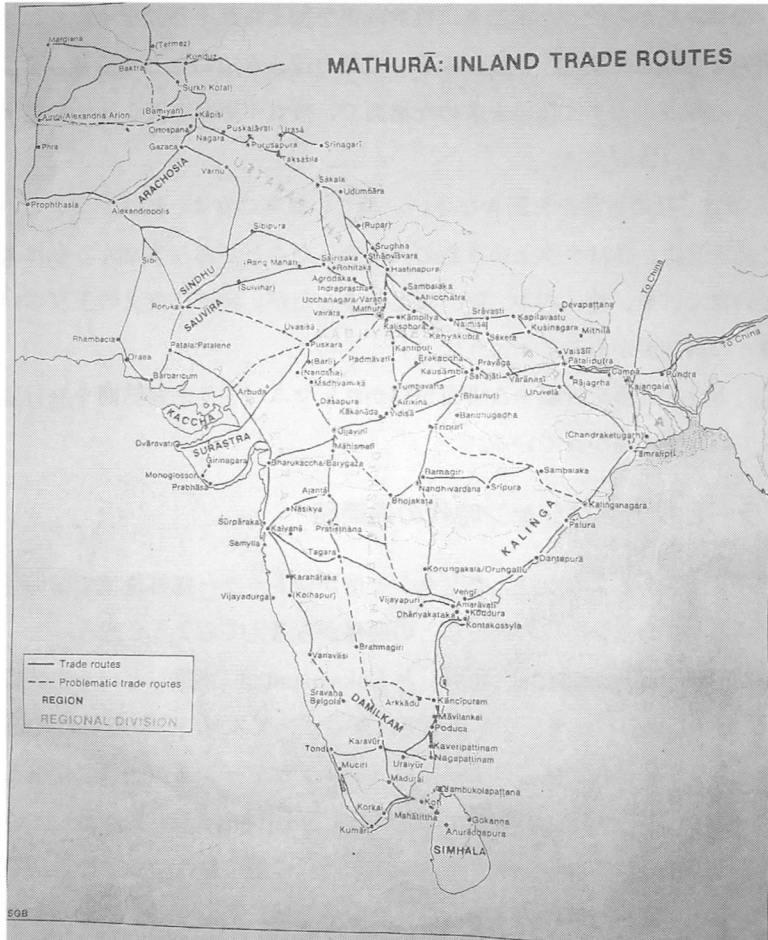
と述べ、マニバドラの加護を祈願する場面が描かれ、マニバドラが貿易商や旅行者の守り神として尊崇されていた様が描かれている。

3. マトゥラーとサカ＝クシャン時代の通商路

次に、2m～3mもあるような巨大なヤクシャ像がマトゥラー郊外地域で信仰されていた背景について、サカ＝クシャン時代の通商路との関係から考えてみようと思う。

遠く釈尊の時代から、Uttarāpatha（北道）と Dakṣiṇāpatha（南道）という主要幹線通商路が発展し、前者によって東のパータリプトラや更に東のガンジス河口に位置した Tāmralipti と西北インドのタキシラが結ばれ、後者によってウツタルプラデーシュ州北部に位置していた舎衛城（Śrāvastī）と西インドの Ujjain やデカン高原の Pratiṣṭhāna（現、Paitan）といった都市が結ばれていたことが知られている。サカ＝クシャン時代の頃にはこの二つの幹線道路上の中継諸都市に繋がる様々な支脈的通商路ネットワークも各地域に形成され、あたかも全インドが通商路の網で覆われているような状況が出現していたらしい。Shiva G. Bajpai はマトゥラー（Mathurā）をこの古代インドの通商路上の 'regional metropolis' として発展し、各地域を結ぶ通商路上の拠点都市であった姿を検証している⁽¹⁶⁾。

Bajpai によると、マトゥラーは主要幹線路であった Uttarāpatha に3つのルートで繋がっていたという⁽¹⁷⁾。第一のルートは、マトゥラーから Yamuna 川沿いに進み、Delhi（古の Indraprastha）郊外 Gajziabad の南約35kmの Bulandshahar 辺りとされる古の Varana を通り、Meerut（Delhi 北東60km辺り）と Saharanpur（Delhi の北北東170km辺り）で Uttarāpatha に合流するルートで、第二のルートは、マトゥラーから現在のデリーを通り、国道1号線をチャンディガル方面に150km 程行った地点にあるハリヤナ州の Kurukshetra（有名なバラタ戦争の場とされる Kurukshetra）を経て、Ambala（デリー＝アンバラ道路沿いにデリー北方約210km地点）辺りで Uttarāpatha に合流するルートであったという。更に、第三のルートは、ヤムナー川沿いに進み Rohitaka（デリー北西約70キロ地点の Rohtak）、Iškāri（デリー西方164km 地点にある Hisar 市）の北西約20km 地点にある Aggalapura（又は Agrodaka、現代の Agroha）、Udumbara（パ



(Shiva G. Bajpai による通商路図)

キスタンの Pathankot) を経て Śākala (Sialkot) で Uttarāpatha に合流するというルートであったという。因みに、この第三ルートの支脈として、Iṣkāri (Hisar) や Śairiśaka (Haryana 州の Sirsa) を経て Punjab 地方の Sibipura (Shorkot) に至り、そこからインダス川沿いの道を用い Kurram 溪谷を通してアフガニスタンの Jelalabad に向かう道や、西には Kapiśa と Kandahar (アレクサンドラポリス) を結ぶ幹線道路に繋がる路もあったという。

更に、マトゥラーは Roruka (Sindhu-Sauvira 地方の首都でパキスタンの Sukkur 南方の Rohri) やインド・ギリシア時代の Patalene (インダス河口の都市、現、パキスタンのシンド地方) など西インドの諸都市にも主に2つの主要ルートによってアクセスがあったらしい。⁽¹⁸⁾ マトゥラーからインドラプラスタを経て、Rohitaka (現、Rohtak)、Rang Mahal (Bikaner 北方のタール砂漠地帯 Suratgarh 付近)、Sutlej 川と Indus 川の合流する辺りの Sui Vihar を経て現代の西インド Surat 地方にあった Barygaza (又は Barbaricum、Bhārukaccha。現、Bharuch) などの海港

都市に行くルートが一つ。次に、マトゥラーからカティヤワール半島先端の Dwarka などの Saurāstra の海港都市に向かうルートとして、現在のジャイプール北方約50kmの地点にある Bairata (古の Virātanagara) を経て、現在のラージャスターン州 Ajmer 北方に位置する Pushkar (古の Pushkara) を経て Aravali 山脈の西側の尾根沿いに進むルートもあったという。更に、Pushkar からは、南に Madyamikā (現在の Ajmer から190km 地点の Rajasthan 州 Chittarugarh) に向かう道もあり、そこから更に Malwa-Gujrat 地方の通商路ネットワークに繋がりが、Bhārukaccha (又は Barygaza) などの重要な海港都市へと繋がっていたといわれる。

マトゥラーから南には、インド・ギリシアのタキシラ王アンティオコスに派遣されたギリシア人ヘリオドロスがヴィシヌ信仰を表明した碑文が発見された Besnagar や、ヴィシヌ神の浮き彫りで有名な Udayagiri 窟院が近くにある Vidiśa や Sāñci (現、Bhopal 郊外) に至る通商路が特に利用されたようである。Vidiśa では、Kosāmbī (アラハバード) 付近の Sahājāti を経て Madya Pradesh 州の Satna 市の南約15kmの地点にある Bhārhut 遺跡を経由して西インドに向かう古の Dakṣiṇāpatha ルートと接続していた。Vidiśa から西に向かい、Ujjainī (現、Ujjain) を経て更に西へ進み Bhārukaccha (又は Balygaza、現 Bharuch) に至り、西インドのアパラータ地方やシンド地方に繋がるルートも利用されていたらしい⁽¹⁹⁾。

Ujjainī から南インドへのメインルートは、更に南下して Madhya Pradesh 州 Kargone 県 Maheshwar 辺りとされる Avanti 国の首都 Mahiṣmati を経て Aurangabad から南に約60kmの Paithan (古の Pratiṣṭāna) に至った。Paithan からは、半島南端部の至る所に繋がる道があったという。Ujjainī から西には、Kalyāna (現、ムンバイの北 Kalyan)、Śrupāraka (ムンバイ近郊の Thane 地域の Nala Sopara に相当) や Cemūla 等の海港都市や、南には Tagara (Paithan の南、Osmanabad 地方の Ter 辺り)、Andhra、Kuntala (現代のナーグプルから南にハイデラバードに至る幹線道の間点 Adhilabad 付近)、Vanavāsī (タミルナドゥ州 Salem 県 Mettur から約20km地点付近)、Punnāta、Tamilakam などの都市に繋がるルートも存在したという⁽²⁰⁾。

4. マトゥラーとガンジス川流域地帯との交流

ガンジス川流域地帯へのルートとしては Utrāpatha があったが、マトゥラーは、当初、この幹線道路の一辺境都市に過ぎなかったらしい。元々は Ahicchatra (Uttarpradesh 州 Bareilly 県 Ramnagar 付近)、Śaketa (Ayodhya)、Śrāvastī (ブツダの時代のコーサラ国の首都舎衛城；Balrampur 近くの Sahet Mahet)、Kuśinagara (Gorakpur 近く)、釈尊が最後に鍛冶工チュンダの供養を受けた地として知られる Pāvā、釈尊の時代のヴァツジ部族連合の中心地であった Vaiśālī (パトナ北方約50km地点) や Mithilā (ネパールの Janakpur から東インドの Dharbanga 辺り) を通る「北の道」が主に利用されていたが、しかし、後代にはガンジス川沿いに Hastināpura (現代の Meerut 北東ガンジス川沿いの地域にあったという) や Sankāśa (Agra の東 Farrukhabad

地方の Fatehgarh の西に位置する Sankissa Basantapura) を経て Kānyakubja (Lucknow 東方に位置する Kanauj) に至り、更に Prayāga (Allahabad 辺り) へと進んで Varānasī (現、ベナレス) に至り、そこから Pātaliputra (現在の Patna)、Campā (釈尊時代のアング国の首都。現、ビハール州都のパトナから東130km 地点の Munger の東のガンジス川南岸辺り)、Kajangala (現ジャルカンド州 Sahibganji 県 Rajmahal 地域) を経てガンジス河口の Tāmralipti (現、Tamluk) に至るといふ「中央の道」が専ら用いられるようになったといふ。⁽²¹⁾

この「中央の道」に平行に、マトゥラーからヤムナー川沿いに、Allahabad の手前約50 km 辺りに比定される Kauśāmbī に向かい、Prayāga (現、Allahabad) で「中央の道」に繋がる「南の道」が利用されていた。Kauśāmbī では、先に見たように、南インドへの Dakṣiṇāpatha (南道) が交り、サータヴァーハナ王朝の首都であった Pratiṣṭhāna (Paithan) と結ばれていた。

ヒマラヤ山麓沿いを通る「北の道」は釈尊の時代に特に利用され、「中央の道」上の様々な拠点都市は、歴史時代の初めから頻繁に目的地とされ、マウルヤ朝以降も顕著な存在であり続け、「南の路」は、サカ=クシヤン時代にマトゥラーが政治的にも経済的にも重要性が増すにつれ、1-3世紀に最も利用されるに至った通商路であったと考えられている。⁽²²⁾

5. 仏教碑文に見る仏教遺跡と他地域に住む人々との交流

以上のように、釈尊の時代から発展した Uttarāpatha と Dkṣiṇāpatha が延長され、他の交易路と複雑に結びつきあいながら、全インドが陸路や海路を用いた全インドを網羅する通商路のネットワークによってカバーされる状況が存在したらしい。マトゥラー、Vidīśa、Ujjain、Kauśāmbī、Pratiṣṭhāna、Tāmlalīpti などの都市が中継ポイントとなり、それらから地域ごとの支脈流通路が展開していたようである。このような流通路を用いた「物」や「人」の流れを検証する術として、通商路上に在った様々な仏教遺跡における他地域からの奉獻者を調べることによってその一部が理解できると思う。

静谷正雄先生は『インド仏教碑銘目録』の中で、Mathurā の101碑文中には、西北インドのスワット地方に相当する Uddiyāna からの寄進者⁽²³⁾や、中央アジアのバダクシャーン (Va[d]akṣa) 出身の寄進者⁽²⁴⁾や、Kosam (現、Allahabad) や Deoriyā 出土銘文と同じ祈願文を有する「東方系の文字」で記された碑文、明らかにイラン系の寄進者⁽²⁵⁾やサカ族の信者⁽²⁶⁾の寄進例があることを指摘している。

マトゥラーからの路とパールフットからの路の交差する Vidīśa 近くにある Sañci の仏塔で発見された904碑文中には Mathurā とのつながりを直接的に示す明らかにマトゥラーで製作された赤色砂岩製の菩薩像や弥勒菩薩像の寄進例⁽²⁸⁾もあるが、この遺跡が主に地元の Vidīśa 近郊の奉獻者⁽²⁹⁾らによって支えられていたことが奉げられた数多くの碑文からわかる。

興味深いのは、約1000キロも離れたマガダ地方 (Kekateyaka) からの寄進者による寄進が2

⁽³⁰⁾例、約60キロ離れたUjjainからの寄進者の寄進が⁽³¹⁾62例、VidiśaとUjjainの間辺りにあったAvanti国のKurarahgar（現、Kurawar）に比定されるKoraghara, Kurghara, Kuraraと碑文中で呼ばれた土地からの奉献者の寄進が60例以上認められる⁽³²⁾ことである。更に、Ujjainの近くの地名とされるMorashihikata（Morajāhikṭa）⁽³³⁾からの寄進例が4例や、Madya Pradesh州のGwalior地方のTonkに比定されるNandinagara⁽³⁴⁾や、約700キロも離れたPshkara（Rajasthan州Ajmer近くのPushkar）からの寄進例⁽³⁵⁾10例、更には、UjjainからPratiṣṭānaに向かう幹線上でナルマダー川沿岸にあったといわれるMahiṣmatī（現、Maheshwar 辺り）からの奉献者も⁽³⁶⁾10例あり、遠隔地に住んでいた優婆塞・優婆夷がSāñciに詣でて仏塔を荘厳する欄楯などの石材を寄進していたことがわかっている。

ガンジス川流域地帯とVidiśaを結ぶ交易路上のBhārhutからは209碑文が報告されている。ここでは、「南の路」上にあったKauśāmbīからの奉献者が⁽³⁷⁾1例、Uttarāpathaの執着地Pātaliputraからの奉献者が⁽³⁸⁾3例あり、また、直線距離で300キロ以上離れたVidiśaからの奉献者の寄進が⁽³⁹⁾5例認められる点も興味深い。

西インドの石窟群に関しては、Junnar石窟で報告されている30碑文の内、千数百キロ離れたパンジャーブ地方と比定されるGatā地方からの奉献者が⁽⁴⁰⁾2例あり、その内の1例（『静谷目録』434）はギリシア人による寄進である。更に、Bhārukacchaからの奉献者が⁽⁴¹⁾1例、約150キロ程離れたMumbai北西のKalyāna（現、Kalyan）からの奉献者が⁽⁴²⁾1例、ムンバイ南方のCamula（現、Chaul）からの奉献者が⁽⁴³⁾2例存在する。

Kārli石窟寺院からは35碑文が報告されているが、約100キロ程離れたムンバイの北方に位置するSopāraからの寄進者の寄進例が⁽⁴⁴⁾2件、MysorのVanavāsiの古名Vejayamati（或いはByzantion=Vijayadurga）と考えられる地域からの奉献者のケースや、特に注目されるのがインド亜大陸の東側クリシュナ川下流でAmalāvati近くとされるDhānyakaṭakaに比定されるDheṇṇakakataから来た寄進者による寄進が⁽⁴⁶⁾17例認められることで、その内6例がギリシア人の名を有している⁽⁴⁷⁾。

Bedsaの石窟寺院からは3例の碑文が報告されているが、Nāsikの住人の奉献例が⁽⁴⁸⁾興味深く、更にKāñheri窟院の27碑文中、Kalyān（現、Kalyan）の住人の寄進が⁽⁴⁹⁾8例、Soparaの住人による寄進が⁽⁵⁰⁾1例認められる。

以上のように、マトゥラーでは、遠く中央アジアやスワット、マガダ地方からのイラン系・サカ系信徒の寄進が認められ、Sāñci遺跡では、時代的にBC2～BC1世紀頃の碑文が殆どと思われるが、近くのVidiśaやUjjain、その中間辺りKurawarのみならず、Madya Pradesh州のGwaliorやマトゥラー、更にはや東のマガダ地方、ラージャスターン州のアジメール近くのPushkaraや、UjjainからPaithanに行く途中にあったゴータヴァリ川沿いの都Mahiṣmatī（現、Maheshwar）など、数百キロから1千キロ以上も離れた遠隔地から訪れた寄進者が為した寄進

が記録されているのである。Kauśāmbī から Ujjain に向かう通商路上にあった Bhārhut では、Kauśāmbī の信者らの他、東のパーティプトラや Sāñci の仏塔があった Vidiśa からやってきた仏教徒の寄進も伝えられている。西インドの石窟寺院群では、Kalyān や Bhārucaccha、Sopāra など西インドの海港都市の富裕な仏教徒の寄進が目立つが、遠くパンジャブ地方や、インド亜大陸の東側のクリシュナ川下流域の Amarāvati 近くの Dhānyakaṭaka に居住していたと考えられるギリシア人仏教徒の寄進など、インドの西海岸側から東海岸に向けての通商路の利用と文物や人の流れを想像することができる寄進の事例が見て取れ、比丘・比丘尼、優婆塞・優婆夷が遠く離れた寺院を信仰の対象とし、通商路のネットワークが寄進者や巡礼者の移動に頗る利用されていた様を伺うことが出来る。

6. 仏教碑文に見る遠隔地に住む商人層らの寄進例

静谷正雄先生は Sāñci に奉獻された碑文の内、Ujjain の住人である寄進者が62件であることを指摘しているが⁽⁵¹⁾、それらの中で比丘による寄進3件と比丘尼による寄進7件を除く碑文の内15件が男性信者、32件が女性信者によるもので、それら在家信者の内、『静谷目録』1186番の碑文には「商人 (vāneja)」である Isidata という名前が記録されている。サーンチーの碑文は仏塔の欄楯などに用いられた石材に刻まれていた関係で比較的短い簡潔な銘文が多いが、それらは比較的富裕な優婆塞や優婆夷による寄進であったとみられ、その中の一つに奉獻者が「商人」であることが述べられている。更に、Vidiśa と Ujjain の間辺りにあったとされる Koraghara からの寄進銘4例には、「組合の頭領」(seṭhin)⁽⁵²⁾ の存在が述べられ、Junnar 石窟からの碑文では、ムンバイ近隣の Kalyāna の「鍛冶工」(suvaṇakāra)⁽⁵³⁾ による水槽の寄進や「会計係」(heraṇika)⁽⁵⁴⁾ による塔院の寄進例が存在する。Kārli 石窟では、マイソール地方の Vanavāsī から来た「組合の頭領」が石の堂を寄進し⁽⁵⁵⁾、Dhenukakata (クリシュナ川下流の Dhānyakaṭaka) から来た「香商」(ghaṇḍhika) が「石の入り口」を寄進し⁽⁵⁶⁾、「大工」(vadhaki)⁽⁵⁷⁾ の寄進者の存在も知られている。更には、「商人の聚落」(vāniya-gāma)⁽⁵⁸⁾ が寄進者として挙げられてもいる。また、「長者」(gahapati) の親族の女性が寄進した碑文や⁽⁵⁹⁾、「医者」(veja) とその家族による寄進も存在する。Bedsa 窟院にも或る「組合の頭領」(seṭhin) の息子が寄進した例もあり⁽⁶⁰⁾、Kāṇheri 石窟では Kalyāna 在住の「組合員」(negama)⁽⁶¹⁾ である優婆塞が家族とともに寄進した例や⁽⁶²⁾、ムンバイ南方の Cumula (現代の Chaul) に住む「会計係」(heraṇikā)⁽⁶³⁾ の子供が水槽を寄進した例、Sopara の「組合員」の優婆塞が水槽を寄進した例が認められる⁽⁶⁴⁾。

以上のように、サカ・クシャン時代の通商路を利用して、遠隔地に住む優婆塞・優婆夷が寺院に大規模・小規模様々な寄進を行っていたケースが報告されているが、それらの中には、「商人」、「組合の頭領」や「長者」、「会計係」、「香商」、何らかの「組合の構成員」、「大工」や「鍛冶工」などの商業従事者や手工業者らが存在したことが記録されており、当時の社会において

商業活動に従事していた様々な種類の人々の存在が明らかにされている。比丘や比丘尼、富裕な優婆塞、優婆夷による通商路を用いた寺院巡りが行われていたことが想像できる。以上見てきた仏塔や石窟寺院などへの奉獻銘は、サカ＝クシャン時代の高度に発展した通商路ネットワークが商品等の「物」の流通のみならず、「人の移動」をも促していた様を伝えていると考えられるが、それら数百キロから千キロ以上離れた遠隔地からの奉獻者らは、自らの職種を述べていない人たちも、当時の商業活動の恩恵を得て富を獲得した社会の富裕者層に属する人々であったことが想像できる。

7. おわりに

マトゥラーから Vidiśa に向かう通商路沿いの地域からヤクシャの大將軍で富の守護者であるとされたクベラや巨大なマニバドラの像が複数発見されている事実は、通商路を利用した流通や経済活動、人の移動との関係に照らし合わせて考えるとその必然性が理解できると思われる。

クベラは富と不死を授ける devatā であり、マニバドラは旅行者や貿易商が守護神として信仰の対象とした devatā であったという。パールカムやバローダ村で発見されたマニバドラ・ヤクシャが商人層に信仰されていたことを直接的に示す碑文は発見されてはいないが、仏教遺跡参りに通商路を利用していた遠隔地に住む人々の移動を示す仏教碑文は多数存在する。更に、同じくマトゥラーから Vidiśa に向かう通商路上にあったと考えられる Gwalior 地方の Pawaya からも台座を含めて1.6m程の高さのマニバドラ像が発見されており、頭部と右手は欠損しているが、パールカムのマニバドラと同じような太鼓腹をした特徴的な姿をし、左手には巾着を持ち富を司る機能を示し、刻まれた碑文からもマニバドラの信仰が一部のバラモンらによって行われていた様を伝えている。⁽⁶⁵⁾

2m以上もあるような巨大なマニバドラ・ヤクシャ像の発見されたバローダ村やパールカムは、マトゥラーからヴィディシヤに至る主要通商路沿いにあったと考えられる。その路は更に Ujjain や Bhārūkaccā など西インドの開港都市や、東に行けばパールフットやサハジャーティーを通過してガンジス川流域地帯の都市らを結ぶ通商路と繋がっており、パールカムやバローダのマニバドラ像が通商路を利用した貿易商らに信仰され庇護された可能性が想像できるのである。

特に、クシャン時代の通商の様子を述べる資料『エリュトラー海案内記』には、政治的な環境変化のため、西方への中国の絹やその他の商品の交易に、Bactria から Pushkarāvati を経てマトゥラーに至る西北インドの幹線道路が主に用いられ、そこから Ujjain を経て Barygaza (又は Bharūkaccha。現、西インド Surat 地方の Bharuch) へもたらされていたと述べられている⁽⁶⁶⁾、更には、中国産の絹織物と絹糸の東の貿易には、Bactria から Uttarāpātha を通りマトゥラー経由で Barygaza へゆくルートが用いられていたとも述べられている。⁽⁶⁷⁾

マトゥラーからウッジヤインに向かう通商路はクシャン時代にはシルクロード貿易の主要幹

線通商路であり、その通商路沿いに設けられた巨大なマニバドラ・ヤクシャ像を祀る祠は、当時の活発な商業活動を支えた貿易商たちや旅行者らにとって道中の安全を祈願する祠堂として機能していたのかもしれない。Ram Nath Misra は *Samyutta Nikāya* (1.208) に、マガダ国にマニバドラの祠堂 (caitya、制底) があり、Maṇimāla (摩尼跋陀羅) と呼ばれていたことを指摘している⁽⁶⁸⁾。パールカムやパローダ村、そして Gwalior 地方の Pawaya (Janshi 付近) で発見された1.6m～3mの高さをしたマニバドラ像も、そういった Maṇimāla に祀られ、通商路を行き交う商人や旅行者、更にはパールカムで発見されたマニバドラ像に刻された碑文にあるように、マトゥラー地域に在って「マニバドラを崇拝する集団 (Māṇibhadrapūgya)」に属し、マニバドラを拠り所としていた人々に安心を与えていたヤクシャ像であったのかもしれない。

注

- (1) J.Ph.Vogel, *Catalogue of the Archeological Museum at Mathura*, Indological Book House, Delhi, 1971.
- (2) 「サカ=クシャン時代のマトゥラーにおけるヤクシャ信仰に関する一考察」『印度學佛教學研究』第51巻第1号、2002年12月
- (3) J. Ph. Vogel, *op.cit.*, Pl.C1.
- (4) H. Luders, *Mathura Inscriptions*, § 139
- (5) *Ibid.*, § 140
- (6) *Ibid.*, § 141
- (7) J. Ph. Vogel, *op.cit.*, p.92, C23
- (8) Ram Nath Misra, *Yaksha Cult and Iconography*, Munshiram Manoharlal, Delhi, 1981, p.61.
- (9) *Ibid.*, p.80
- (10) *Loc.cit.* Āraṇyaka Parva 33. 140. 1-5; J. A. B.van Buitenen, trans. & ed., *The Mahabharata*, The University of Chicago Press, 1975, P.490.
- (11) *Ibid.*, p.81
- (12) *Loc.cit.*
- (13) *Ibid.* p.80
- (14) M. N. Dutt, *Mahabharata*, Vol.7, Parimal Publications, Delhi, 1994 (reprint), p.433.
- (15) 上村勝彦、『原典訳マハーバーラタ』3巻、ちくま書房、2002年、174頁
- (16) Shiva G. Bajpai, "Mathurā: Trade Routes, Commerce and Communication Patterns, from Post-Mauryan Period to the End of Kuṣāṇa Period," *Mathura: the Cultural Heritage*, [Doris Meth Srinivasan ed.], American Institute of Indian Studies, New Delhi, 1989.
- (17) *Ibid.*, p.47
- (18) *Loc.cit.*
- (19) *Loc.cit.*
- (20) *Loc.cit.*
- (21) 因みに、Tāmralipti (現、Tamluk) 経由で、カリंगा地方の Dantapura (一説にはオリッサ州の Puri)、ケララ地方の Tropina、マハラージェトラ地方の Perumala 或いは Chaul を経てシンド地方の Pātāla に至るという道にも繋がっていたという (*Loc.cit.*)。ガンジス川の河口から、海路を利用し半島の東西に散在した海港都市との交流も知られ、特に、アーンドラ地方で有名な都市や海港都市としては、Dhānyakātaka、

Amalāvati, Nagarjunakonḍa, Vijayapuri, Tamilakam, Kollapattana (或いは Kaveripattinam)、そして Madura などが挙げられている (*Loc.cit.*)。

- (22) Jason Neels, *Earaly Buddhist Transmission and Trade Networks*, Brill, Leiden・Boston, 2011, p.198.
- (23) 『静谷目録』 577
- (24) 『静谷目録』 585
- (25) 『静谷目録』 622
- (26) 『静谷目録』 606, 607, 608
- (27) 『静谷目録』 632, 642, 664
- (28) 『静谷目録』 1668, 1669
- (29) 『静谷目録』 791, 858, 877, 934, 949, 985, 1043, 1072, 1104, 1665, 1125-28, 1259, 1270, 1579, 1665
- (30) 『静谷目録』 766, 770
- (31) 『静谷目録』 776の注参照：766, 777, 814, 816, 820, 821, 822, 823, 824, 825, 826, 827, 828, 829, 830, 831, 832, 833, 835, 841, 842, 872, 906, 911, 963, 989, 1004, 1009, 1010, 1011, 1012, 1013, 1014, 1015, 1016, 1017, 1018, 1019, 1055, 1113, 1164, 1177, 1179, 1181, 1186, 1188, 1189, 1191, 1192, 1197, 1201, 1231, 1262, 1267, 1403, 1413, 1415, 1419, 1565, 1620, 1622, 1627.
- (32) Koraghara : 801, 967, 972, 1073, 1075, 1096, 1162, 1254, 1264, 1288
Kurghara : 836-7, 1029-31, 1095, 1146, 1198, 1250, 1336, 1577, 1607, 1653,
Kurara : 860, 893, 869, 901, 943, 952, 966, 1032-6, 1038-41, 1103, 1156, 1161, 1374, 1377, 1578, 1394, 1395, 1396, 1397, 1398, 1399, 1417, 1429, 1430, 1452, 1453, 1454, 1478, 1503, 1521, 1562, 1563, 1582, 1608, 1650, 1652, 1654
- (33) 『静谷目録』 869, 1057, 1496, 1262 (Morajābhikṣa)
- (34) 『静谷目録』 779, 780, 909, 929, 931, 932, 973, 987, 1006, 1066, 1067, 1068, 1069, 1070, 1071, 1076, 1106, 1140, 1142, 1166, 1167, 1169, 1171, 1230, 1249, 1261, 1340, 1353, 1412, 1432, 1433, 1474, 1499, 1500, 1578, 1596.
- (35) 『静谷目録』 971, 974, 1083-6, 1461, 1477, 1487, 1666.
- (36) 『静谷目録』 979, 1101, 1102, 1105, 1157, 1222, 1232, 1233, 1234, 1238
- (37) 『静谷目録』 212
- (38) 『静谷目録』 197, 238, 240
- (39) 『静谷目録』 219, 221, 236, 256, 304
- (40) 『静谷目録』 434, 437
- (41) 『静谷目録』 448
- (42) 『静谷目録』 434
- (43) 『静谷目録』 458, 469
- (44) 『静谷目録』 496, 497
- (45) 『静谷目録』 458
- (46) 『静谷目録』 492, 494, 495, 498, 499, 500, 502-12
- (47) 『静谷目録』 495, 498, 500, 503, 505, 509
- (48) 『静谷目録』 171
- (49) 『静谷目録』 463, 470, 472, 473, 479, 480, 485, 486
- (50) 『静谷目録』 468
- (51) 『静谷目録』 静谷正雄『インド仏教碑銘目録』平楽寺書店刊、p.89碑文番号776の注参照。
- (52) 『静谷目録』 943, 952, 967, 1254

- (53) 『静谷目録』 456
- (54) 『静谷目録』 458
- (55) 『静谷目録』 489
- (56) 『静谷目録』 492
- (57) 『静谷目録』 494
- (58) 『静谷目録』 502
- (59) 『静谷目録』 511
- (60) 『静谷目録』 512
- (61) 『静谷目録』 171
- (62) 『静谷目録』 470, 472, 473, 485
- (63) 『静谷目録』 469
- (64) 『静谷目録』 468hnm
- (65) 杉本卓洲「Yaks.a と菩薩—Mathuraa の仏教をめぐって—」『金沢大学文学部論集 行動科学篇 3』 pp.81-82、永田郁「インド古代初期におけるヤクシャの神像彫刻について」『名古屋大学博物館報告』 No.19, 2003, pp.59-60.）。杉本先生は Pawaya のマニバドラ像を紀元前 1 世紀頃のものとし、台座碑文を次のように訳している：「王にして主 (svāmi) なる Śivanamdi の紀元 (saṃvatsara) 第四年、夏分 2 月の 12 日、この日に、ギルド (goṣṭhi) なる Maṇibhadra に誠信を捧げる人たち (Māṇibhadra-bhaktā)、胎児を得たことを喜べる人々 (garbhasukhitāḥ) が、尊き (bhavavato) Maṇibhadra の像 (pratimā) を設立した。ギルドに対し、尊き方 (bhagavā) は長寿 (āyu)、弁舌 (vāc)、幸福 (kalyāṇa)、繁栄 (abhyudaya) を与えんことを (dśatu)。バラモンなる Gotama, Karamara, バラモンなる Rudradāsa, Śivattradāya (?), Śambhūti, Jīva, Khamjabala, Śivanemi, Sivabhadra, Kumaka, Dhanadeva の寄進 (dā)。」(杉本, *op.cit.*, p.82.)
- (66) Wilfred H. Scoff. *The Pelipulus of the Erythraean Sea*, Munshiram Manoharlal, New Delhi, 1974, p.42 & pp.187-189.
- (67) *Ibid.* pp. 268-271.
- (68) Ram Nath Misra, *op.cit.*, p.81.:『南伝大蔵経』第12卷相应部有偈篇第十の四、摩尼跋陀の項 (pp.362-363) に、釈尊が摩揭陀國の摩尼跋陀羅迦制底の摩尼跋陀夜叉の住居に滞在していた時、摩尼跋陀夜叉が世尊に詣でて正念を確立したものには安樂を得て吉祥で怒りより解脱すると讃嘆するのに対し、世尊が正念を得たものは確かに安樂を得て吉祥であるが、怒りより解脱するのではなく、すべての生きとし生けるものを慈しむが故に、いかなる怒りもないのだ、と述べる話が収録され、マガダ國の摩尼跋陀迦制底が言及されている。

Summary

A Consideration on the Social Background of the Cult of Mañibhadra Yakṣa in Mathurā during Saka-Kushan Period

Takahide TAKAHASHI

Many Yakṣa images have been reported from Mathurā and its surrounding region. Among them, what attracts us is a huge Yakṣa image, whose height being 2.6 meters, found from Pārkhām. Still more huge Mañibhadra image, whose height is estimated about 3.6 meters, has also been reported from the nearby Baroda village. It so happened that they had been found in the area along the ancient trade route connecting Mathurā and Vidiśa and further to Ujjain and other trading centers of Saka-Kushan period. Besides, it is known that Mañibhadra Yakṣa was the guardian *devatā* of traders and travelers from the Epic literature. In this paper, we try to examine the nature of the cult of Mañibhadra, by observing the condition of ancient Indian trade routes, especially in relation to the importance of Mathurā as a regional metropole. We also try to examine the mobility of Buddhist lay devotees, who seem to have utilized the network of trade routes in Ancient India, by examining Buddhist dedicatory inscriptions not only in Mathurā but also in Sāñcī, Bhārhut, Junnar, Kārlī and in Bedsa. Not only monks and nuns, but also Upāsakas and Upasikās, who gained wealth through commercial activities, living in far-away distant regions seem to have visited those Buddhist Stūpas and Cave temples to pay homages. The Mañibhadra images found in Mathurā may have provided safe cradles for those travellers who used the trade routes.